

龍谷大学大宮図書館 二〇一三年度特別展観

絵のある本



龍谷大学大宮図書館 二〇一三年度特別展観

— 絵のある本 —

絵のある本

目次

ごあいさつ

図録

1	滴翠園十勝	7
2	蓮如上人御物語	8
3	二河白道図〔報恩列聖図畫〕見返し)	9
4	正依修多羅師子吼図	10
5	善悪双六極楽道中図絵	11
6	志んらんき(しらみ本)	12
7	(和字絵入)往生要集	13
8	十卷抄	14
9	五輪九字明秘密釈	15
10	五天竺之図	16
11	大谷尊由師書画卷「飲中八仙歌」	17
12	帝都西山雅景画図	18
13	東海道分間之図	19
14	職人尽歌合	20
15	絵本百鬼	21
16	(新增)女諸礼綾錦	22
17	新編塵劫記	23
18	天球図	24
19	平天儀	25
20	諸儀象図	26
21	華陽皮相	27
22	紹興校定経史証類 備急本草	28
23	舎密開宗	29
24	百花式(池坊花百観図)	30
25	JAPANESE COLOUR PRINTS(日本の浮世絵)	31
26	狩野派習画卷	32
27	花洛一覧図	33
28	芥子園画伝	34

龍谷大学図書館長 安藤 徹

29	和漢名画苑	35
30	JAPANESE FAIRY TALE SERIES (日本の昔噺)	36
31	The Hanshi Zasshi (英文反省会雑誌)	37
32	日本永代蔵	38
33	黄表紙十種	39
34	児雷也豪傑譚	40
35	北斎漫画	41
36	絵本太閤記	42
37	奈良絵本 長恨歌	43
38	奈良絵本 大和物語	44
39	奈良絵本 大織冠	45
40	奈良絵本 ふんしやう	46
41	奈良絵本 住よし物語	47
42	奈良絵本 ふしの人あな	48
43	奈良絵本 志賀物語	49
44	奈良絵本 竹取物語	50
45	奈良絵本 竹取物語	51
46	あかし物がたり(丹緑本)	52
47	源氏物語絵巻	53
48	三十六歌仙画帖	54
49	三十六歌仙絵巻	55
50	五色手鏡	56
51	須弥山儀銘並序	57
52	縮象儀説(図)	58
53	世界大相図	59

【凡例】

- ・ 展示物の総数は、冊子を「〇冊」、折本を「〇帖」、畳み物を「〇鋪」、卷子本を「〇巻」、掛軸を「〇幅」で表記。
- ・ 年月日(西暦除く)や員数の二桁の数字は「十」で統一。
- ・ 生没年の付記は、その本の著者をはじめ必要最低限とし、各人の初出時に限る。
- ・ 引用箇所のルビは、原本にあるものと執筆者のものとのを区別しない。
- ・ 書誌登録情報に準拠して表記。
- ・ 展示順序は、展示会場内の状況により一部異なる。

龍谷大学図書館長

安藤 徹

図書館とは「図書」の「館」です。では、「図書」とは何でしょうか？それは、絵画(絵図)と書物のことです。つまり、文字どおり理解するならば、図書館が収集し、整理・保存し、そしてみなさんの利用に供するのは、絵(図も含む)と本なのです。もちろん、現代はモノとしての図書だけでなく、デジタル化されたいろいろなデータ・資料も取り扱います。とくに大学図書館では近年、電子化された情報の比重が大きくなる傾向が顕著です。とはいえ、その基本にあるのは、やはり本と絵です。ここで注意したいのは、〃本と絵〃というとき、本にも絵にもさまざまな種類と広がりがあるということであり、両者をつなぐ「と」という助詞にもじつに多様な関係が折り畳まれているということです。

龍谷大学図書館では毎年、テーマを設定して、所蔵する貴重な古典籍などを展示し、広く学内外に公開する「特別展観」を開催しています。今年度のテーマは「絵のある本」です。ただし、挿絵のある〃絵入り本〃に特化した企画ではありません。むしろ、さきほど述べた〃本と絵〃が内包する多種多様なありようをかいま見ていただくべく、形態も分野・内容も彩り豊かな構成となっています。

荒俣宏『絵のある本の歴史——BOOKS BEAUTIFUL』(平凡社、一九八七年)→ちくま文庫、一九九五年、平凡社版は本学深草図書館にも所蔵)は、一八〜二〇世紀の西洋〃挿絵本史〃を多くの美麗な図版とともに辿っており、それ自体が〃絵のある本〃です。そのなかで荒俣氏は、挿絵

〃イラストレーション(illustration)」の「ラストレ」が「光り輝かせる」という意味のラテン語に由来し、あるいは挿絵の一形式とも言えるページ余白の彩飾〃イルミネーション(illumination)」の「ルミネ」の語源もまた「光らせる」であることを指摘しています。このように文章を、ページを、そして本を輝かせる挿絵の魅力は、本展観を通じても存分に味わっていただけるものと思います。いっぽうで、厳密には〃本〃でない資料も展示されていますが、〃絵〃が輻射する力そのものを体感することで、絵のある〃本〃の輝きもいっそう深く感取できるにちがいません。それぞれの展示品によつて描かれ、紡がれる〃本と絵の星座〃の世界を、どうぞ心ゆくまで堪能ください。

なお、本学図書館のホームページでは、多くの貴重な資料をデジタル画像データとしても公開していますので、ぜひそちらもご覧ください。

二〇一三年一〇月

※今回の展観は、二〇〇六年大宮図書館改修記念として刊行されました『絵のある本』をもとに、開催しました。
また、図録は『絵のある本』を参照して編集しました。

右艶雪林

詩酒謫仙人古今推獨步
寫君醉裡顏不啻黃金鑄

右青蓮楸

愛此寒泉冽醒眠舊得名
園池存古井香界水尤清

右醒眠泉

日午花無影茅檐四面圓
能催春晝夢蝴蝶正翻

右蝴蝶亭

明月照仙陂夜來好清嘯
鏘然鸞鳳音不是人間調

右嘯月陂

文化壬申孟冬

斐太 赤田義拜具

男暢代書



1 滴翠園十勝

一卷 江戸時代写 紙本着色卷子本 縦四〇・五×横二四三・五cm

〔請求記号 024.1.100.1 新写字台文庫〕

滴翠園十勝は、西本願寺の境内にある飛雲閣(国宝)が建つ名勝庭園のことである。飛雲閣は豊臣秀吉の聚楽第に建てられた後に、西本願寺へと移築されたものと伝えられている。この庭園には飛雲閣をはじめ滄浪池、竜背橋、踏花塙、胡蝶亭、嘯月坡、黄鶴台、艶雪林、醒眠泉、青蓮榭の十の景勝があり、これらを滴翠園十勝と称した。そして、この景勝を讃える詩歌が多く吟詠されている。

この彩色写美絵巻の序文には、文化五年(一八〇八)、赤田義が詩を附している。巻初に本図巻作製の因縁を叙し、「四十年前に滴翠園十勝を選んで、各の景勝に因んで詩を賦していたのを、たまたま『都名勝図絵』を披見して想起したので、飛雲閣図を描いて十勝の詩を記録した」という意味のことを述べ、次にその詩を録して

文化壬申(九年) 孟冬

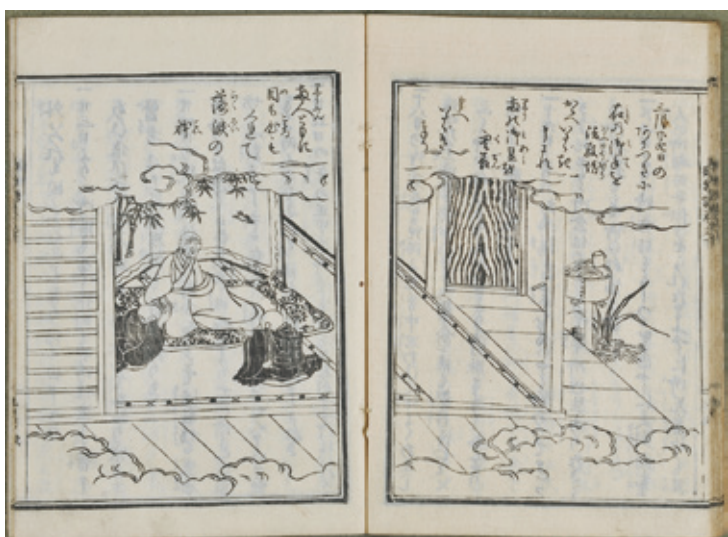
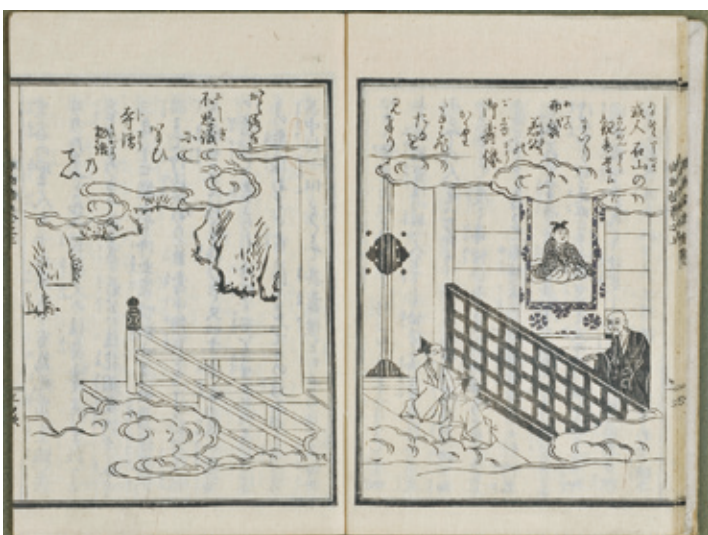
斐太 赤田義拜具

(印)(印)

男暢代書

(印)(印)

との作者の署名がある。文化九年(一八一二)から四十年前は、安永元年(一七七二)に当たり、西本願寺第十七世宗主法如上人(一七〇七-一七八九、諱光門、諡信慧院)の世代に相当する。当時の飛雲閣並びに園内の諸相を想起せしめる資料として、大変貴重な図巻である。尚、作者の赤田氏は、飛驒の人と思われるが、経歴は未詳である。



2

蓮如上人御物語

二冊 安永九年（一七八〇）刊本後印 縦二・五×一五・八cm

〔請求記号 024.3481.2〕

上下二巻からなる。記述内容は、蓮如上人の誕生から往生、収骨、中陰に及ぶ生涯を百二十条に収めたもの。最後に山科本願寺と大坂御坊の記述がある。

もとの奥書として「天正八年九月中旬清書之」とあり、天正八年（一五八〇）に清書されている。本書には作者が記載されていないが、蓮如上人の十男で天正十一年に没する実悟の編集した『蓮如上人二期記』がもとになっていることがわかる。本書は安永九年（一七八〇）刊本の後印であるが、もとは正徳三年（一七一三）に木版印刷したものの復刻である。



3 にがびやくどうず 二河白道図 (『報恩列聖図畫』見返し)

一巻 枯信画 享保十五年(一七三〇)写

卷子本 縦三二・五×横三四・一cm(見返し部分)

〔請求記号 024.101.27.1 新写字台文庫〕

中国浄土教の大成者善導大師は、『観無量寿経疏』の中に「二河白道の譬喩」を著した。旅人の前に、火と水の大河に挟まれた細い白道が、東西の岸に渡っている。後ろからは群賊・悪獣が迫り、とどまっていれば死は必定である。そのとき東岸から「この道を行け」と勧める声が、西岸からは「汝一心正念にして直ちに來たれ、我よく汝を護らん」と呼ぶ声がした。旅人は決心し、白道を踏み進み、ついに西岸に到達することができたという。譬喩のモチーフは、先行する『妙法蓮華経』などの經典が源流になっているとされている。

この譬喩を絵にしたのが『二河白道図』である。入信から往生に至る様を表したものとして、浄土諸宗の信仰鼓舞のため活用された。

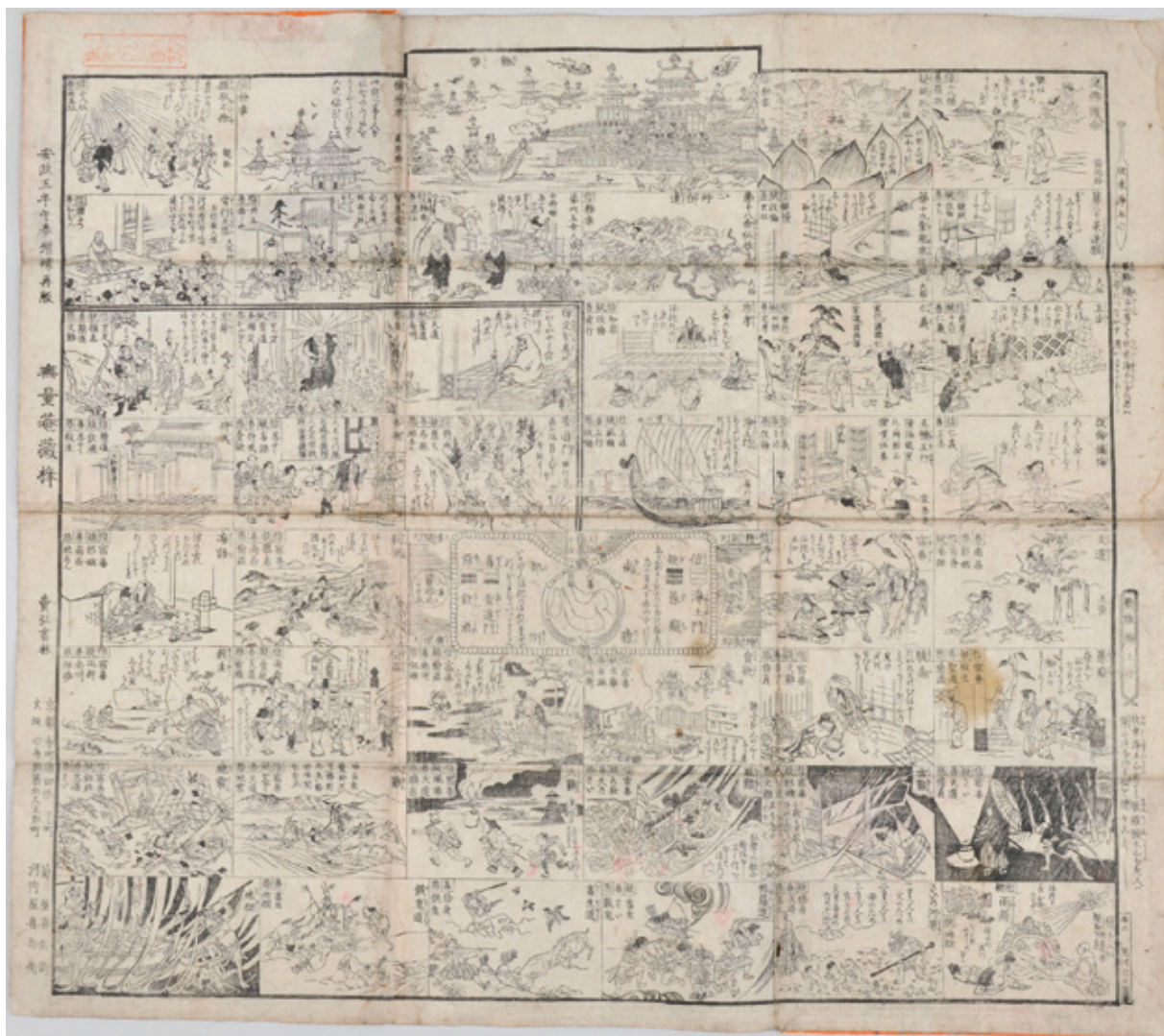


4

正依修多羅師子吼図

三幅 巨勢金起画 三條實美讀 明治時代写 縦三〇・七×横七一・四cm
 (請求記号 021.1-100-3)

釈尊が浄土三部経を説法している図を曼荼羅風に描いたもので、右から大無量寿経説法図、観無量寿経説法図、阿弥陀経説法図の三幅から成り、上部にそれぞれ経文の讃名が書かれている。讃は明治政府の重鎮三條實美(一八三七〜一八九二)の筆で、彼は本願寺第二十一代宗主明如上人と親交があったようである。画家の巨勢金起の経歴等は詳らかではない。



5 善悪双六極楽道中図絵

一舖 黒河玉水画

安政五年（一八五八）増補再版 縦五八・五×横六六・五cm

〔請求記号 796.7-1W-1〕

当該資料は、絵双六の一種で、江戸時代に流行したいわゆる「浄土双六」の類である。紙面を四十六マスに分け、上半分に「善」、下半分に「悪」を表す絵を配する。振り出しは、紙面中央の「南瞻部州」である。浄土双六は、中国の選仏図や変相図など、絵解きを底本にして作られている。賽の目は、おそらく「信・疑・善・悪」と書かれており、「信」の目で「浄土門」、「疑」の目で「愚痴」、「善」の目で「聖道門」、「悪」の目で「飲酒」のマスに飛び、またそこから賽を振って飛び進んでいくルールであった。後は「極楽」もしくは「地獄」のどちらかまで上がりとなる。絵を見ながら「仁義」や「忠孝」などの勧めや、勧善懲悪など宗教的要素も含まれた娯楽性に富んだ双六であったため、庶民へも広く普及した。しかし、その庶民性ゆえに消耗品として扱われることも多く、完全な形で残っているものは少ない。



6 志んらんき(しらみ本)

一冊 寛文三年(一六六三)刊 縦一八・六×横一三・四cm

(請求記号: 021-354-1)

親鸞聖人が初めて文芸の上に、浄瑠璃という形式で表されたもので、聖人の伝記を、初段の出生から六段の平太郎物語まで、巧みに仕組み、娯楽化したものである。本願寺系統の親鸞聖人伝ではなく、客の入りを目的として巷間に流布していた『親鸞聖人御因縁』などが抛りどころになつたと考えられている。

正保五年(一六四八)頃までこの浄瑠璃は興行されていたが、東本願寺から上演を禁じられている。浄瑠璃太夫たちにとっては、禁止を受けても興行したいほどの魅力的な作品であつたという。

なお、刷り文字の書体が、あたかも「しらみ」が蠢いているように見えることから、「しらみ本」ともいわれる。



7 (和字絵入) 往生要集

三冊 寛政二年(一七九〇)再刻 縦二二五×横一五・九
〔請求記号 B 冊 063〕

当該本は、元禄二年(一六八九)版をもとに寛政二年に版木を彫り改めた再刻本である。他の版はいずれも大本であるが、寛政二年再刻本はそれよりも小さい半紙本である。

刊行した菱屋治兵衛は仏書を専門とする版元(書肆)ではない。巻末には菱屋治兵衛の広告(「福寿軒藏板目錄」)が付されているが、もちろんそこに記されている書物も『万葉百人歌海』や『女今川教文』といった往来物の書物が目立つ。さらには、仏書とはほど遠い恋文の指南書も記されている。

寛政二年再刻本のみならず、『和字絵入往生要集』は、江戸時代の庶民にとって極めて身近な書物であり、その享受のあり方は、仏教・信仰という範疇にとどまらず、一般的な教訓、ときには現代風という「怖いもの見たさ」といった娯楽的な興味関心によって迎えられたものであったことが想像される。

なお、当該本には手彩色が施されるが、同一版種の諸本には彩色のないものが多い。



8 十卷抄

十帖 挿絵百四十二図 恵什撰
 元禄十五年(一七〇二)写 縦二九・九×横一三・八cm
 (請求記号 022-743-10)

別名『図像抄(鈔)』、『恵什鈔』、『十巻図像鈔』とも呼ばれている真言系の書。恵什撰。永巖(一〇七五〜一一五一)撰とする説もあるが、永巖が恵什に命じ作らせたともいわれている。全十帖で構成され、内容は金剛界五仏から諸天までの諸尊の図像百二十図をあげてそれを解説したもの。本書は般若三昧院旧蔵のもので、奥書などから延慶二〜三年(一一三〇九〜一一三二〇)仁和寺印元書写の高野山真別処・円通寺本をもとに元禄十五年(一七〇二)に作られた写本と思われる。保存状態は極めて良い。



此九字曼荼羅源出五輪門中九字門其九
 字門曼摩伽菩薩因位發四十八願即是教
 風出九字門九字貝足即云九字自此九字
 出九字曼荼羅從是出一百十三字真言即
 是九字曼荼羅尼問此陀羅尼句義何知
 大梵本句義曰
 月此工瓦子也也 飯命頂禮三身三寶
 度我皈依敬等義月此也

9 五輪九字明秘密積

一冊 覺鑿撰 木活字本古版 縦二五・二×横一五・九cm
 (請求 equal 022-85-11)

新義真言宗の祖師覺鑿(興教大師、一〇九五〜一一四四)の著作で、真言宗と浄土宗の融会を説いた新説とみられるもので、聖道門より浄土門に移る架け橋ともみることが出来る。五輪とは大日如来の三昧耶曼陀羅である地水火風空のことで、九字とは阿弥陀如来の真言である。この五輪と九字は同一体なりということ説いたものである。どこの地方で刊行されたかは明確ではないが、体裁などから考えると高野版の系統に属しているといえる。



10 五天竺之図

一幅 明治初期写 縦一七三・〇×横二二八・〇cm

(請求記号 023.1.152.1)

この地図は貞治三年(一三六四)、重懐が書写した法隆寺所蔵の「五天竺之図」を元とし、さらに新しい知識を加味して明治の初期に描かれたと推定されている。この地図は仏教的世界観の古地図であり、玄奘のインド求法の行程を赤い線で示し、『大唐慈恩寺三藏法師伝』や、『大唐西域記』から地名を採用し、その中から抜粋した説明文を付記している。日本(右上の部分)は、銅版刷りのものを貼付して補ったものである。ふくよかな卵形の南瞻部州図の中に、玄奘三蔵の遍歴の跡を『大唐西域記』に基づいて朱線で書き込んでいる。

西遊記にも記されたこの高僧の、巡拝の旅をしのぶためのもので、距離・方位に無頓着であるが、俱舎論に説かれた、すべての仏教宇宙的要素が忠実に描き込まれている。南東には島(現在のスリランカ)が波濤の中に浮かんでいる。



11 大谷尊由師書画卷 「飲中八仙歌」

いんちゅうはっせんか

一卷 大谷尊由師画 大正十四年(一九二五)作

縦三六・八×横六〇七cm

新収集資料

大谷尊由師(一八八六～一九三九)は浄土真宗本願寺派第二十一世宗主である大谷光尊(明如上人)の五男として生まれた。兄は大谷光瑞師。第二十二世宗主となった兄光瑞師を助け、本願寺執行長や本願寺派護持会財団理事長などを歴任し、大谷探検隊の支援者のひとりでもあった。光瑞師が宗主の座を退いてからは、政界に進出し、貴族院議員となり、第一次近衛内閣では拓務大臣に就いた。宗教家、政治家として知られる大谷尊由師には、いま一つ、芸術家としての貌があった。心斎と号し、多くの秀作を遺している。

「飲中八仙歌」もその秀作の一つであり、大正十四年(一九二五)の作品である。貴族院議員になる三年ほど前にあたる。この時期は、光瑞師が上海郊外に鉄筋コンクリートの新無憂園を新築し、トルコへの進出を構想していた頃である。「飲中八仙歌」は杜甫の漢詩で『唐詩選』にも入っており、画題としてはよく知られたものであったろうが、師の詩想が窺い知れる作品である。師の芸術活動は西本願寺の有する芸術性と無関係ではなく、「西本願寺の芸術」を俯瞰するうえでも欠かせないものである。



12 帝都西山雅景画図

一巻 二十五図 河村文鳳自筆画

頼山陽自筆序文 江戸時代後期写 縦三・〇×横二〇・五〇cm

〔請求記号 022.1-200-1〕

京都の名所雅景を彩図した文化六〜十三年（一八〇九〜一八一六）刊行の版本『帝都画景一覽』の原本である。絹本に着色している。京都の画家、河村文鳳（二七七九〜一八二二）の肉筆二十五図が描かれている。文鳳は山水・人物・花鳥・獣画などに優れた画家として知られており、本画図は版本とほぼ同一のものである。今宮から嵐山まで、東山の部を除く西・南・北の図が含まれる。典雅な趣のある画で、各図には金字で地名を表記している。巻首に漢学者で古書画を愛した頼山陽（一七八一〜一八三三）自筆の序文三十一行があり、巻末には「文鳳写意」の署名がある。全長は一〇五〇cmの長巻である。



13 東海道分間之圖

五帖 遠近道印作 菱川師宣画
 元禄三年(一六九〇)刊 折本 縦二八・〇×横一六・六cm
 (請求記号 023.2.19.5 写真本文庫)

測量・地図作成の専門家の遠近道印と、浮世絵師の菱川師宣との合作によるユニークな道中図。街道の部分は一万二〇〇〇分の一の縮尺で、街並みや山・樹木などから道行く人々まで、道中の風物がすつきりと表現されている。

折本に仕立てるために、事実と異なったところもあるが、ところどころに方位を挿入して、実用に不便のないようにしてある。



14 職人尽歌合

三冊 明暦三年（一六五七）刊 縦二四・三×横一七七cm
 （請求記号 911.0924W3 写字台文庫）

別名、『七十一番職人歌合』。職人歌合が成立したのは十四世紀から十六世紀で、職人を左右に分けて歌を競わせ、判者が優劣を定めるといふ歌合の展開の中に、職人像を描き込んでいる。恋と月とを歌題として、七十一番百四十二人という多数の職人を収集し、上・中・下の三冊からなる。絵は土佐光信が描き、大納言和長が歌詞を書いたことが『群書類従』に記してある。この歌合の図は、室町時代の産業文化の実態を示す職人資料として、また、風俗資料として極めて貴重な存在である。



15 絵本百鬼

三冊 鳥山石燕画 安永五年(一七七六)刊 縦二二五×横一五七cm

(請求記号 91364/M3 写字台文庫)

別称を『絵本百鬼夜行』『百鬼夜行』ともいう。古くより、「百鬼夜行」といわれ、夜間、いろいろな妖怪が列をなして出て歩くという迷信があることに由来していると考えられる。これらは江戸時代後期に大量に出版され、「百鬼夜行」といえば「妖怪の本」を表すほどであった。写字台文庫内には妖怪図鑑ともいえるこのような書物が収められていることは大変興味深い。鳥山石燕(一七二二〜一七八八)の描く本書は、上・中・下の三冊からなり、ろくろくび、やまびこ、河童、ひょうすべ等、現在でも耳にする妖怪が数多く記載されている。

上のページには「ぬらりひよん」が記載されている。商人のような格好をしたぬらりひよんは、人々がせわしなくしている夕方、どこからともなくやってきては、勝手に家の中に入りこみ、座敷でお茶などを飲む。まるで自分の家であるかのように入ってくるため、人は気づかないことが多いという。ともかくとらえどころのないぬらりくらりとした妖怪である。



16

〔新增〕女諸礼綾錦

おんなしよ れい あやにしき

一冊 木村茂雄編 森春漢(有煙)画

天保十二年(一八四二)刊 縦二五・二×一七・四cm

〔請求記号 354.6-14W-1〕

『女諸礼綾錦』に『女諸通用文章』を加えた一冊本。『女諸礼綾錦』の上巻では、巻頭に女性の諸芸などの色刷り口絵が数葉あり、続いて「女の道を守るべき事」「女子三従の事」「平生心得の事」「人に挨拶の事」などの記事がある。下巻には、「客人の前に出る事」「膳を下げる事」「見合いの事」などが掲げられている。

『女諸通用文章』には「初春に遺す文」以下四十八通の女文を載せている。



17 新編塵劫記

一冊 吉田光由編著 寛永四年(一六二七)刊 縦二六〇×横一八・二cm

(請求記号 022.549.1)

本書は、江戸時代初期の算学者吉田光由(一五九八〜一六七三)の著作で、和算書の中で最も知られている存在である。江戸時代初期から頻繁に刊行され、その版種は膨大な数に上る。

内容は、米や布の売買、土地の面積、体積、高さなどの計算例をあげ、なおかつ図解するものである。説明の文章も平易であることから、庶民階層にも広く普及した。その人気は絶大で、初刊まもなく海賊版が横行した。そこで、著者吉田光由は、寛永十一年(一六三四)版の刊行に際し、その一部分を色刷りにして、海賊版と著者自身が関与する版本との差異を明確にした。もちろん、多色刷は当時としては未だに珍しいものであり、海賊版の版元にはマネのできない最先端の技術であった。

吉田光由の外祖父は、豪商として広く知られる角倉了以(一五五四〜一六一四)で、その父兄は貿易に従事するものであったという。また一族の角倉素庵は嵯峨本(慶長年間に刊行された美術的な古活字版で本阿弥光悦も関与する)の刊行に深く関与し、角倉家は近世初期の出版文化と関わりの深い家であった。吉田光由が色刷りに目をつけたのも、こうしたことと無縁ではないとされている。



18 天球図

一舖 司馬江漢著 木田三郎右衛門訂正

寛政八年(一七九六)刊 銅版 縦四〇六×横九八〇cm

〔請求記号 021-267-1〕

司馬江漢(一七四七〜一八一八)による銅版の星座図。本来は『和蘭天説』と組で出されたものである。もともなかった図は、オランダの地図製作者フレデリック・デ・ウィット(Frederick de Witt 一六三〇〜一七〇六)の天球図と推測されているが、近年では幕府所蔵の天地両球儀を補修した北山晋陽(？〜一八〇二)の『天球十二宮象配賦二十八宿図説』とその息子寒巖(一七六七〜一八〇二)による『フィッセル改訂ブラウ世界図』の模写を参考にしたことが指摘されている(橋本寛子「司馬江漢筆『天球図』制作背景をめぐって」『美術史』一六四)。

江漢の『天球図』は、南北の円周の縁に沿うように十二宮像と反転した二十八宿(古代中国で月・太陽の位置を示すために、天球を二十八に区分したもの)が合わさっている。星座は禽獣人物異形でもって表したもので、それぞれの星座名はオランダ語で記されているが、十二宮だけは日本で使用している星座名に訳されることが、本文中に「日本ノ法ニ訳スレハ熊ノ全身ノ星ハ北斗七星ト文昌ノ六星ナリ」と記されているところからわかる。彩色は後から施したものと思われる。

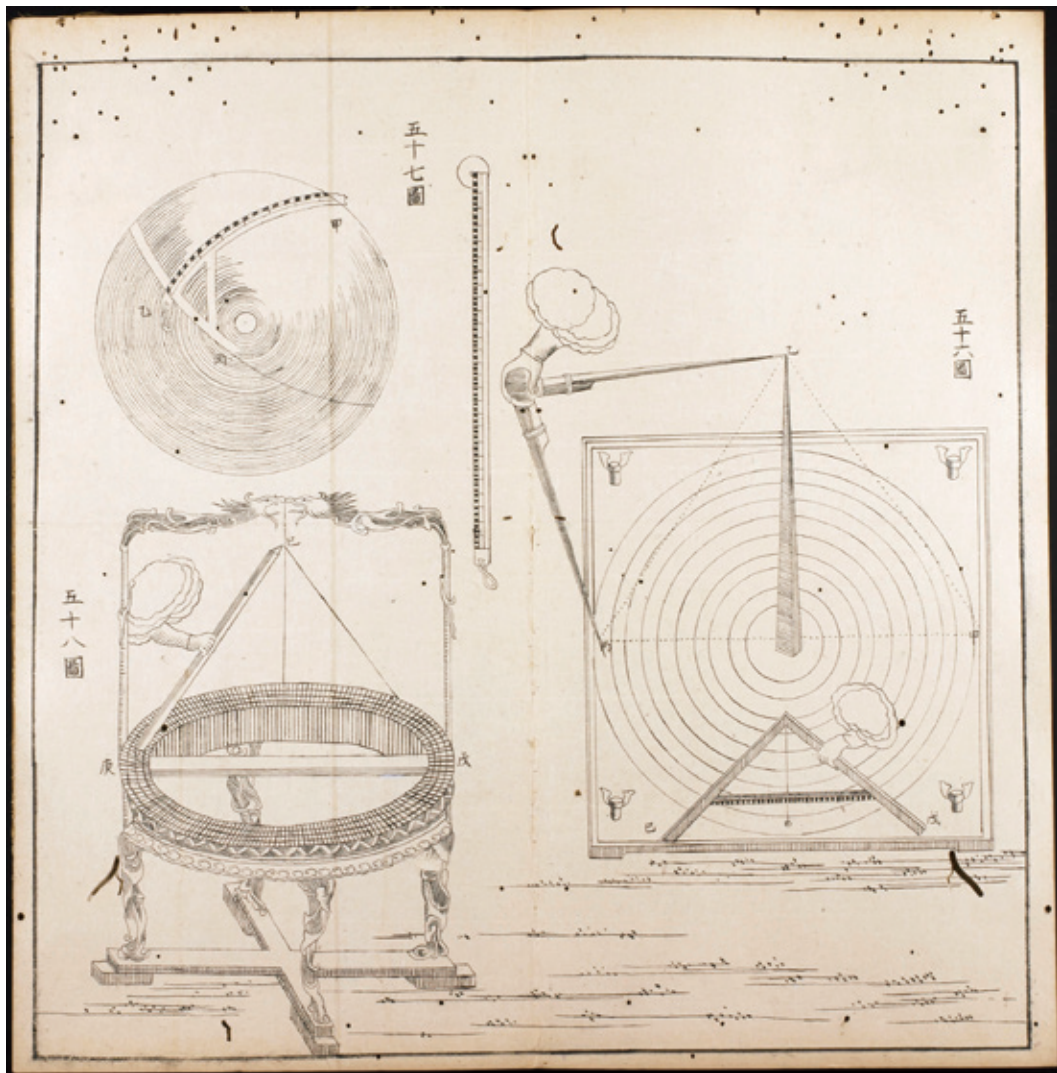


19 平天儀

一冊 岩橋嘉孝(善兵衛)作 享和頃刊 縦二八五×横三五・五cm
 (請求記号 G433W1 写字台文庫)

平天儀とは、星の位置を地図のように平面上に記した星図を指している。享和(二八〇一〜一八〇三)の頃、大坂泉南の人、岩橋善兵衛(諱嘉孝、称巖橋氏、号耕珣堂、一七五六〜一八一二)が平天儀なる装置を製作したと伝わる。これは五層の薄板の円盤を中心で止めて互いに回転し得るようにしたもので、今日の星座早見盤に似ている。中央一番上の盤に地球が描かれ、次に月や太陽、黄道の描かれている盤、地球の二十八宿の描かれている盤などに分かれ、地球上各地の月・太陽・潮汐の干満などの関係が分かるようになっている。

龍谷大学図書館所蔵本は、享和元年(一八〇一)の刊記がなく、説明記事が通行本に比べて簡略であることから、通行本が完成した享和元年四月以前に刊行された版であるとされ、稀少である(海野一隆「岩橋嘉孝の『平天儀』」『科学史研究』四五卷二三七号)。



20 諸儀象図

二帖 百七十七図 フェルディナンド・フェルビースト撰
 江戸後期写 折本 縦三三・八×横一六・八cm
 (請求記号 600.622.2 写字台文庫)

フェルディナンド・フェルビースト (Verbiest, Ferdinand 中国名・南懷仁、一六二三〜一六八八) は、中国において康熙帝に天文学・数学を進講し、天文観測の諸器をつくり、北京観象台にて地理、地質、天文について論じた人物である。ベルギー生まれのイエズス会士でもあったため、西洋の知識を伝え、西洋暦採用の端緒をも開いた。

本書は天文に係る諸儀の図をまとめたもので、観象台図や黄道儀、赤道儀、天体儀、揮天儀などの図が全体で百七十七図ある。



21 華陽皮相

三冊 平沢旭山(元愷)著
 寛政元年(一七八九)刊 縦二七〇×横一八七cm
 (請求記号 680.9-1W3)

馬の種類や毛色、各種名称などを図解した解説書。三冊目の『華陽皮相原稿』(漢文)を国文になおして説いたものである。馬に関する特徴などを学術的に詳述している。図には木版彩色がされており、色などの特徴がわかりやすいよう配慮されている。著者の平沢旭山(一七三三-一七九二)は、羽倉春満の学流を汲んだ人物で、その著書は多い。



22 紹興校定經史証類 備急本草

二十四冊 (宋)王繼先等校

宋紹興二十九年(一一五九)上進 江戸後期写 縦二六・五×横一八・八cm

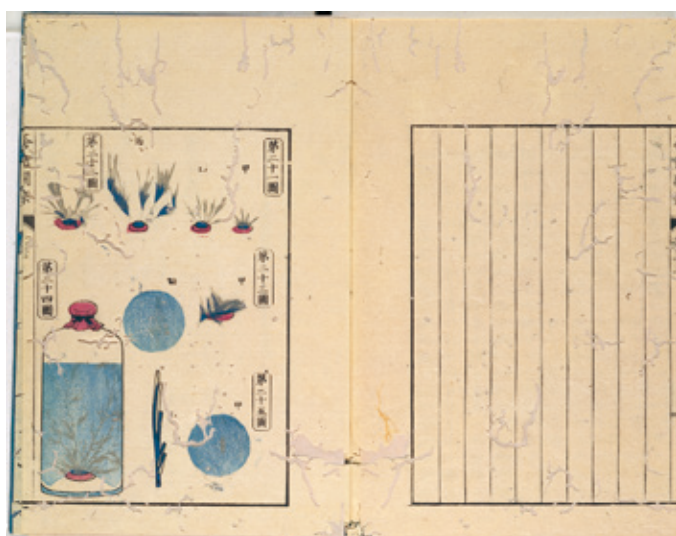
(請求記号 021-543.24 写字台文庫)

本書は、宋代の王繼先(?-一一八一)らによる薬物書であり、その成立・刊行・伝承には不詳な点が多々あるが、一般には次のように考えられている。

紹興二十七年(一一五七)に王繼先が校上した『大観本草』が国子監から刊行され、ついで継先らは詔を奉じて同書を再校し、自注も加えて同二十九年(一一五九)に『紹興校定經史証類備急本草』と名づけて進上した。

本書は日本に龍谷大学本二点を含め、計二十七点の所蔵が知られており、大英図書館・台北故宫博物院図書館・北京図書館も各一点を所蔵する。すべて日本写本で、国外へは明治以降に伝えられた。

写字台文庫蔵の当本には六百十九葉が載り、うち五百十葉について計七百九十二の図がある。後人の手がかなり加えられ、錯簡や誤脱もあるが、絵はよく文も多く、内容が豊富な点では伝写本中の善本とされる。当本は岡西為人氏の解題を付し、昭和四十六年(一九七二)に東京・春陽堂より原寸大で影印出版されている。



23 舎密開宗

七冊 ウィリアム・ヘンリー原著 宇田川榕菴訳

天保八年（一八三七）〜弘化四年（一八四七）刊

縦二五・八×横一八・〇cm 彩色図入

〔請求記号 630.10W.7 写字台文庫〕

日本最初の化学書。イギリスの化学者ウィリアム・ヘンリー（William Henry 一七七五〜一八三六）の著書『実験化学要義（Elements of Experimental Chemistry）』（一七七九年刊）をドイツ語訳し、さらにオランダ語訳として重訳したものを原本とし、幕末の蘭学者宇田川榕菴（一七九八〜一八四六）が、晩年の情熱を傾けて訳した名著とされる。訳とともに自らの注釈・実験の結果も記している。「舎密」はラテン語系オランダ語の Chemie（化学）の音訳であり、「開宗」は、「物の大元を啓発する」という意である。これまで日本における化学に関する知識は、薬剤を調整する必要から医者によって研究されていたが、本書によって初めて科学のカテゴリーの一つとしての「化学」が樹立されるに至った。全七篇二十一巻、内篇十八巻六冊・外篇三巻一冊より成る。片仮名交りの本文、彩色刷の挿画多数入。初篇から六篇に内篇十八巻を、七篇に外箱三巻を収録。

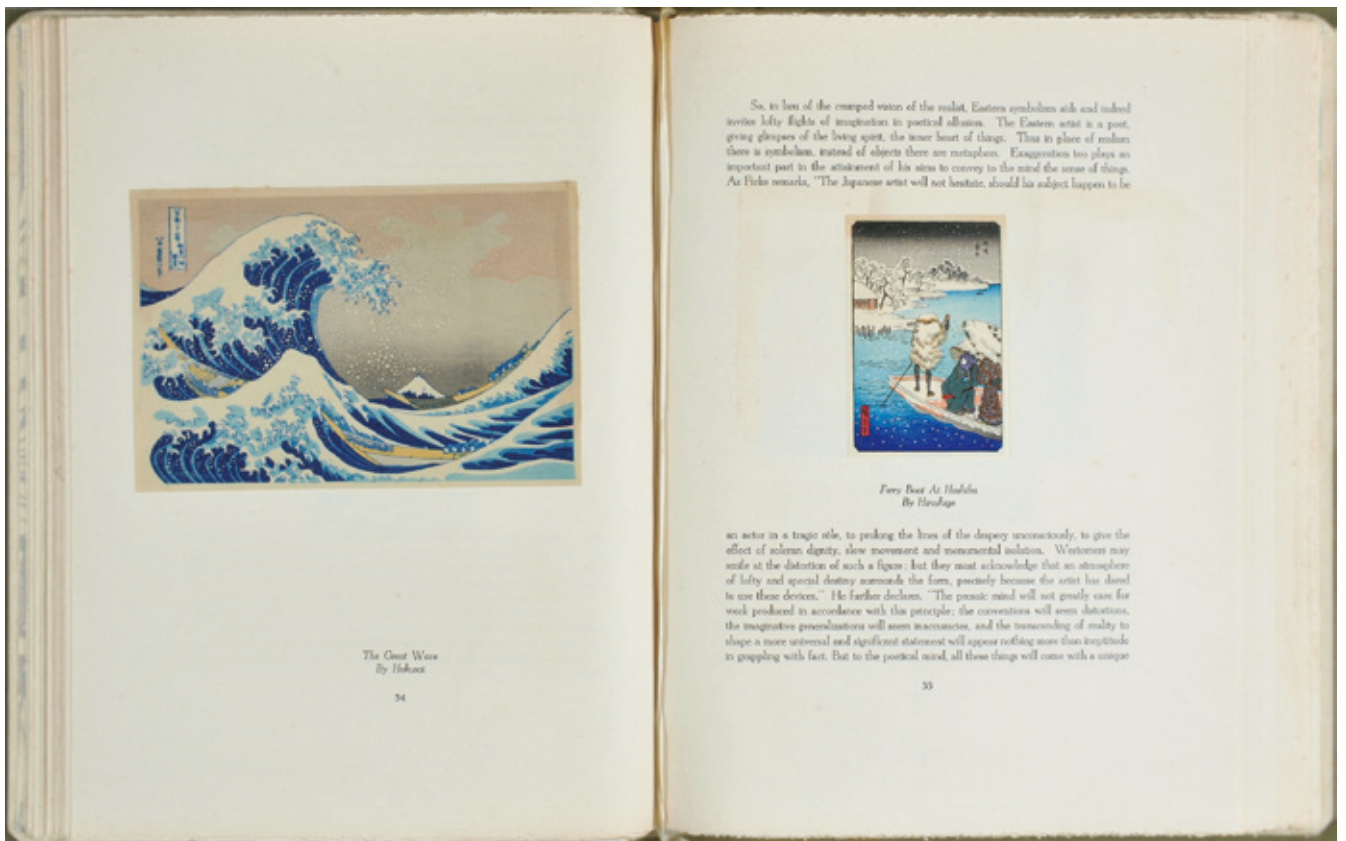


24

ひゃっ
か
しき
百花式(池坊花百観図)

一冊 池坊專定撰 文政三年(一八二〇)自序刊 縦二八・七×横一八・六cm
〔請求記号 022.495.1〕

池坊專定(一七六九〜一八三三)は江戸時代後期の華道家で、生花を格調あるいけばなとして位置づけ、池坊生花の基礎を定めた。画家の岸駒(一七五六〜一八三九)に学び梅花を描くのが得意であった。「百花式」は文化文政年間(一八〇四〜一八三〇)にその門流の秀作を撰したいけばな作品集ともいうべきものである。



25

JAPANESE COLOUR PRINTS (日本の浮世絵)

一冊 Barnett, P. Nevill 著 一九三六年刊 縦三四・〇×二六・四㎝

〔請求記号 022-761-1〕

この本の正式タイトルは『Standard De Lux Edition of Japanese Colour Prints』で、百八十五冊を限定として出版された内の一冊に当たるものと推定される(鉛筆書きで「185」とある)。内容は日本の浮世絵の歴史が書かれ、歌川広重の作品の他に、鈴木春信、葛飾北斎、歌川国芳、川瀬巴水などの浮世絵が九十四枚貼られている。このページの左には北斎の代表作で、様々な場所や角度からの富士を描いた富嶽三十六景の内の一つ「神奈川沖浪裏譲り」、右のページには歌川広重の「橋場雪中」の浮世絵が貼られている。



26 狩野派習画卷

一巻 狩野永納・永敬・永伯筆

近世前・中期頃写 紙本彩色・水墨画 縦二七五×横九二三・七cm

〔請求記号 022.1.213.1〕

書題簽「永納筆古画家」。二十九の絵を集成した図巻。描かれているのは人物・動物が多く、墨画もしくは淡彩の施されたもの。絵に付された印は「永納」「永敬」「永伯」の三種類で、装飾的な独特の表現に定評がある京狩野の三・四・五代目、狩野永納（一六三一～一六九七）、永敬（一六六二～一七〇二）、永伯（一六八七～一七六四）の手になるものと考えられる。

絵は、「人丸」「釈迦」など題が付されたものがほとんどで、題とともに前代の画家の名が記されたものも多い。それらの名は、狩野元信・松栄直信・永徳・孝信・尚信ら狩野派の先達の他、鳥羽僧正覚猷、可翁、如拙、雪舟、長谷川等伯、雲谷等顔などであり、こうした人々の作品を研究のため写したものだと考えられる。



27 花洛一覽図

一舖 黄(横山)華山画
 文化五年(一八〇八)刊 縦三六・八×横六三・九cm
 (請求記号: 491.41-16W-1)

「花洛」とは京都のこと、およそ二百年前の京都を一望できるように描いた洛中洛外の図である。

図中右にひととき大きく方広寺の大仏殿が描かれている。この大仏殿は寛政十年(一七九八)に落雷で火災にあい焼失しているので、この図はそれ以前の京都の姿を描いたものと思われる。

本図の特徴は、京全体を一枚の絵に収めた携帯用絵図として描いていること、洛中洛外の神社仏閣を精細に鳥瞰図として描いているところにある。また図中には御土居があり、四条通、今の南座のあたりには、のぼりが立ち芝居小屋があった様子がうかがえ、往時を彷彿とさせる絵図である。

図を描いた黄華山(二七八四〜一八三七)は、岸派の絵師で人物画を得意としていたが、この絵図を描いて大いに称賛されたといわれている。



胡長伯画自文正
峰入手晚乃出入
叔明子久其筆古
質婦類文代以肯
人書學禮器碑



28

芥子園画伝

初集五冊 (清)王翬撰 江戸時代刊 縦二七・五×横一八・四cm

(請求記号: 720.94W.5 写字台文庫)

清の王翬(字安節、一六四五～一七一〇頃)が山水画の画法を詳述した書。「芥子園」とは金陵(南京)の画室の名。康熙十八年(一六七九)に第一集初版が刊刻された『芥子園画伝』は、早くも元禄年間(一六八八～一七〇四)には日本に伝えられ、寛延元年(一七四八)以降にたびたび翻刻された。

龍谷大学本は刊行年こそ不明であるが、版元書誌から寛延～宝暦(一七四八～一七六四)頃の最初期の翻刻本の一つと思われる。刷りや色合いの良好さは、康熙初版を十分しのばせるに足る。



29 和漢名画苑

六冊 大岡春卜編 寛延三年(一七五〇)刊 縦二六・〇×横一八・〇cm
 (請求記号 720.9・72W/6 写字台文庫)

和画・漢画の模写粉本を縮図によって編集した画本。大坂の画家・大岡春卜(一六八〇〜一七六三)によるもので、元文四年(一七三九)の自跋がある。大岡春卜は、若い頃江戸狩野派を学び、後に明画風の作風で法眼(法印に次ぐ僧位)となる。当時流行した絵本類の挿絵画家として大坂で活躍した。巻二・土佐流之部に「おどり」と題された八人の男女の輪舞図があり、その表情や指先の表現は「相応寺屏風」の画風と類似している。



30 JAPANESE FAIRY TALE SERIES (日本の昔噺)

六冊 明治十八年〜二十四年(一八八五〜一九〇二)刊
 縦一八・二×横一一・三cm
 (請求記号 022.682-1.2,3,4,5,19)

この本は「縮緬本」といわれる、和紙に活字を印刷し、織物の縮緬と同様の感触になるように特殊加工して作られた小冊子である。寛政の前後より大正の頃まで流行した。なかでも東京の長谷川武次郎の欧文縮緬本などはその典型的なものである。

『JAPANESE FAIRY TALE SERIES』は、桃太郎、舌切雀、猿蟹合戦、花咲爺、かちかちやま等、日本の昔噺を英文にし、美しい色彩画で描いている。英文以外にもドイツ語本もあり貴重である。

明治以降、日本の昔噺・詩歌や風俗などを居留外国人の手で欧州語に翻訳し、色摺木版の挿絵をほどこした軽装本が、外国人観光客に人気の高い土産物となった。欧米の子供用絵本にラグブックと呼ばれる布製の絵本があるが、縮緬本も本物の布に摺られた絵本と思えば、本国の子どもへのプレゼントに買われたこともあったらしい。この製作は、平摺りした木版画を芯に巻いて圧力をかけ縮緬布風に縮めた特殊な技法であり、長谷川武次郎がこれを一手に手掛けた。英語のみならず仏・独・蘭・西語などの版が刊行されたことから、国際的に人気があったことがうかがえる。



31 The Hansai Zasshi(英文反省会雑誌)

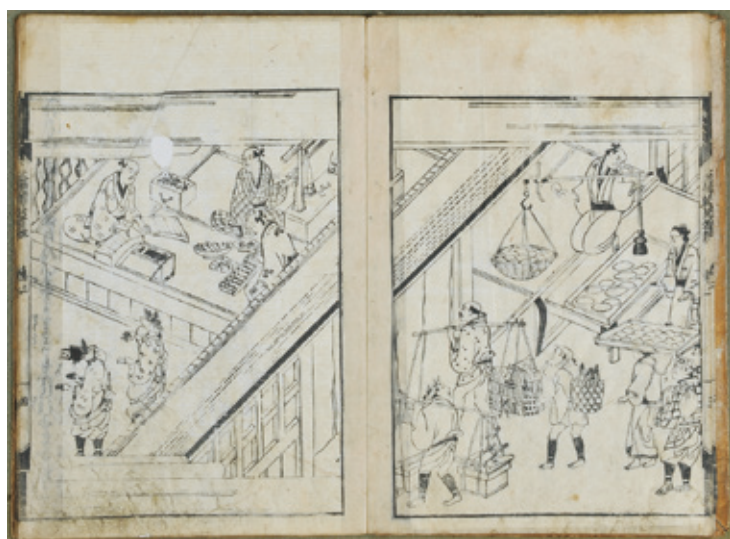
九冊 明治三十年～三十一年(一八九七～一八九八)刊
 縦一四・〇×横一七・〇cm

(請求記号 024.1:1669 新学芸台文庫)

明治十九年(一八八六)、龍谷大学の前身である普通教校の教授や学生を中心に「反省会」が組織された。禁酒を断行し、普段の行いを正そうという社会改良運動である。この反省会の機関誌として誕生したのが『反省会雑誌』(明治二十年(一八八七)発行)である。

この雑誌は明治二十五年(一八九二)に『反省雑誌』、さらに明治三十二年(一八九九)には『中央公論』と改題、我が国初の総合雑誌へと発展していった。

『The Hansai Zasshi』は明治三十年(一八九七)に東京で発行され約二十号が刊行された。毎号、冒頭口絵の美しい錦絵版画で飾られている。この画家は当時、新聞や文芸雑誌類に挿絵を描き、浮世絵画家と令名の高かった尾形月耕(一八五九～一九二〇)である。



32

にほんえいたいごら
日本永代蔵

六冊 井原西鶴著 貞享五年(二六八八)刊 縦二四・九×横一七・六cm

(請求記号 913.62(28W-6))

井原西鶴(一六四二―一六九三)の代表作品で、町人三部作の『日本永代蔵』『西鶴織留』『世間胸算用』の第一作が本書である。京・大坂・江戸を中心に諸都市の町人の興亡盛衰談を内容とする町人物のすべてにわたる根本的思想が示されている。副題及び版心にある「大福新長者教」から儲け主義に徹した版元の意欲が読みとれる。

永代蔵は話の面白さと町人道の教訓性から、江戸時代を通して多くの読者を得ており、従って異版も多く、各地の風俗や人情に関する読者の関心に応えて、六巻の登場人物を地方別に改編して出版したものなどがある。また摺出しも多数で、版面の磨滅が甚だしいものがある。本書も磨滅の箇所が部分的にあるが、摺りはおおむね良好である。



33 黄表紙十種

十冊 江戸時代刊 縦一七・五×横二二・八cm
 (請求記号 913.57-8W-10)

当館所蔵の黄表紙本には、十返舎一九作・歌川豊広画の『蓮之若葉』『岩井櫛』『阿古屋』『お婆捨山』や、恋川春町作・画の『雛形意気真顔』など十種類がある。

黄表紙本は、江戸中期以後、黒本・青本に続いて現れた小型の絵入り通俗読み物の一種で、安永(一七七二)〜一七八二(頃)から天明(一七八一〜一七八九)末年までの十数年間が全盛期であった。萌黄色表紙から、より廉価な顔料を使用した黄色表紙へと移行していったことにより、黄表紙と呼称されるようになった。



34 児雷也豪傑譚

五十七冊 合巻本

美図垣笑顔・一筆庵主人他作 香蝶楼(歌川)国貞・国輝・国芳他画

江戸時代刊 縦一八・〇×横二二・〇cm

(請求記号 913.639W-57)

本書は、中国・宋の説話集『諧史』に想を得た読本『自来也説話』を模倣した伝奇長編である。四十三編(未刊)の合巻で、江戸の和泉屋市兵衛によって刊行された。合巻とは、江戸後期の草双紙の一種で、伝奇性と娯楽性の濃い絵画小説版本である。

本書は美図垣笑顔をはじめ、複数の作者によるものであることから、作柄に変化を見せて展開する特徴を持つ。

内容は、主人公の児雷也が蝦蟇の精霊道士から妖術を授かり、悪人や妖怪を討つ英雄的義賊として活躍するというものである。好評を得て大いに流行した本作は河竹黙阿弥によって劇化され、嘉永五年(一八五二)、歌舞伎『児雷也豪傑譚話』が江戸の河原崎座で上演された。その後、人気役者の主演が更なる評判を呼び、双六や錦絵が多く製作された。また、明治時代には、歌舞伎の粗筋をまとめた二十丁の合巻も刊行された。出版と芝居の興行が影響し合い、密接な相互関係を見せた作品であるといえるだろう。



35 北斎漫画 ほくさいまんが

四冊 葛飾戴斗(北斎)著

文化十二年(一八五二)刊 縦三三・〇×横二六・一cm

(請求記号: 720.9-08W4 写子台文庫)

浮世絵師として著名な葛飾北斎(一七六〇〜一八四九)は、自ら画狂人と称するほど終生描くことに情熱を燃やし続け、九十年に及ぶ人生を画業一筋に歩んだ偉大な人物である。その彼が、一般庶民の画技習得のために編んだ手本が『北斎漫画』で、庶民の信仰に関わるものから、日常生活具、動物、植物など多種にわたる絵が収められている。特に、働いている人の姿や、相撲を取っている人の姿など、人間の姿を描いた画は、手足の筋肉の動きなどが実に躍動的でありリアルに描かれている。



36

繪本太閤記

初編至六編七十二冊 武内確齋著 岡田玉山画
 寛政九年（一七九七）〜享和元年（一八〇一）刊 縦二二五×横一五七cm
 〔請求記号 913.65-19W-72 写字台文庫〕

文章の読みやすさと絵の面白さから、江戸時代後期の大衆に、豊臣秀吉伝説を定着させた作品。当時の民衆は、内容の真偽を判断する手段が他になかったため、伝説というよりも、むしろ真実として、豊臣秀吉が大衆化されていったに違いない。

『繪本太閤記』が完成した三年後の文化元年（一八〇四）に、豊臣氏関係の出版統制により、幕府から絶版命令が出されている。当時の幕府は、出版について、徳川將軍家にかかわる写本の書名、大名・旗本にかかわる事柄は名称すら避ける姿勢であったことが指摘されている。『繪本太閤記』では秀吉の活躍の他、家臣達の活躍も描かれていることから、その子孫の大名や旗本にもかわる書物としても絶版されたといわれる（佐藤悟「文化元年の出版統制と考証随筆」『文学』八卷三号）。



37 奈良絵本 長恨歌

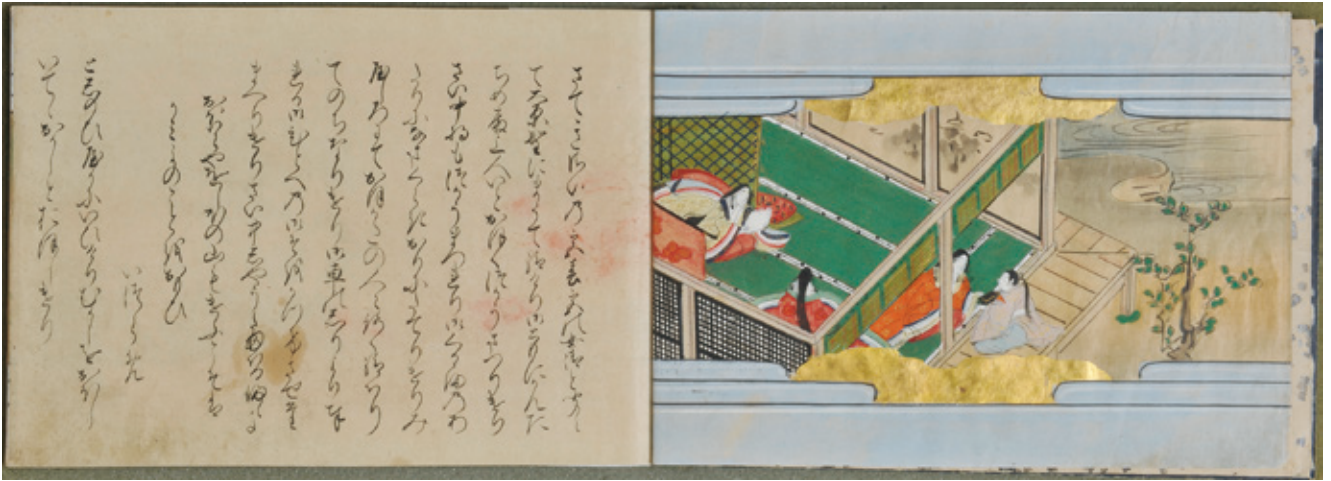
三冊 寛文・延宝(一六六一〜一六八〇)頃写
 縦一六・五×横二四・三三
 (請求記号 021-587-3)

「長恨歌」は唐の詩人白樂天による長篇叙事詩で、玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を伝えるものとして広く知られている。日本では平安時代から親しまれ、江戸時代には狩野派の絵師によって豪華な絵巻物が製作されたり、あるいは『長恨歌図抄』(延宝五年(一六七七)跋)のような絵入版本が刊行されたりした。また、『源氏物語』の桐壺巻は『長恨歌』を翻案した物語ともいわれている。

当該本は、寛文・延宝頃に作成された奈良絵本で、上巻の首に「長恨歌」の由来を仮名文で記した序があり、以下詩句を一節ずつあげ、その釈文を添えている。

表紙は紺色地の金泥下絵表紙。題簽は藍色地に金泥下絵をあしらひ、表紙中央に貼られている(原題簽「ちやうこんか上(中・下)」。上巻は、紙数二十九丁、挿絵五図(その内、見開きは一図)。中巻は、三十三丁、挿絵五図。下巻は、二十八丁、挿絵四図。料紙は間似合紙。

古い時代に「長恨歌」を絵巻や奈良絵本化したものは現在全く伝わっておらず、現存している本はすべて江戸時代に入ってからのもので、その数も極めて少ない。

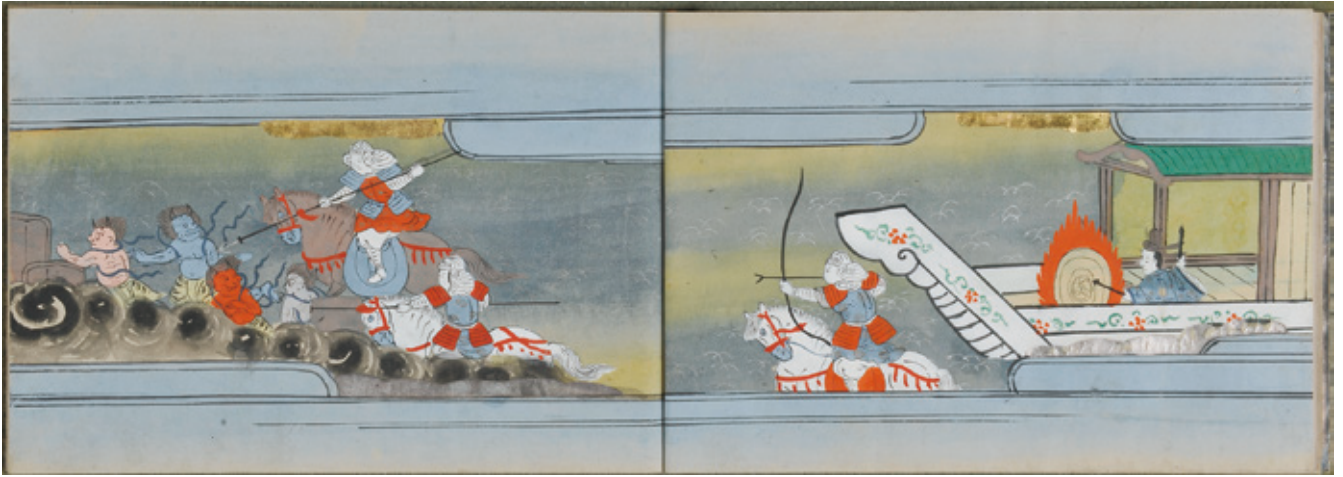


38 奈良絵本 大和物語

一冊 江戸時代写 縦一七・〇×横二五・四cm
〔請求記号 021-590-1〕

『大和物語』は和歌を主とし、恋愛・伝説などを主題とする百七十余編の物語を収録したもので、宇多朝から村上朝にかけての後宮における歌語りの集成と見られる。この時代は『古今和歌集』が編まれ、『土佐日記』が書かれるなど、和風の文化が隆盛し、「ひらがな」による表現が文学作品としても定着していく時代だった。

表紙は、藍地に金泥で藤の文様、外題は白地に金箔が施された題簽に、「大和物語」とある。表紙見返しは、金・銀箔を散してある。本文中の絵は十六図にのぼり、奈良絵本の「大和物語」としては絵図の多さが特徴である。



39 奈良絵本 大織冠

三冊 江戸前期写 縦一五・五×横三三・〇cm
 (請求記号 021-593-3)

表紙は紺色地に金泥で花・蝶・木が描かれており、中央に橙色題簽で「大しよくはん 上」の外題がある。見返しは銀箔が貼られ、型押し of 唐草模様がある。挿絵十三図。本文は毎半葉十三行、毎行十二〜十四字程度の漢字交じりの平仮名文で書かれており、若干の誤脱や衍りを除いて刊本の「舞の本」とほぼ一致するが、中冊の本文には、書写もれか脱落が一箇所見受けられる。

挿絵は典型的な奈良絵で、霞に一部金銀箔を用いている。およそ近世前期頃に写されたものであろう。剝落等はほとんどなく、保存状態は良好である。



40 奈良絵本 ふんしやう

上・中二冊 〔江戸時代享〕 縦一五・八×横二三・〇cm

〔請求記号 022.487.2〕

もともと三冊本であったが、下巻を欠いている。「ふんしやう」「ふんしやう物語」「文正草子」などさまざまな名称で呼ばれている。御伽草子の中でも、農民や商人・町人などを主人公にした庶民性豊かなものである。

内容は、大宮司に仕えていた男が主人から暇を言いわたされるが、その後製塩で成功して長者になるという、極めてめでたい立身出世を主題とした物語である。そうしたことから、この草子は「祝の草子」とも「めでた物語」とも呼ばれ、正月の子女の読書初めに用いられていた。



41

奈良絵本

住よし物語すみがたり

三帖 江戸初期写 縦三・二×横一七・五cm

(請求記号 022-748-3)

『住吉物語』は現存する伝本が多く、写本・版本・絵巻などを含めて、実に百種類以上にも上っている。伝本の分類を略本系・流布本系・中間本系・広本系の四種に分ける立場によれば、本書は流布本系の本文を有するものである。

物語の内容は典型的な継子物語で、継母が姫君の結婚を妨害するが、最後は長谷寺観音の靈験により幸福な結婚生活をするというもの。成立は古く、平安時代初期にまで遡るが、時代の変遷の中で散逸し、鎌倉時代に現在の内容になったといわれる。挿絵は上・中・下各五図ある。



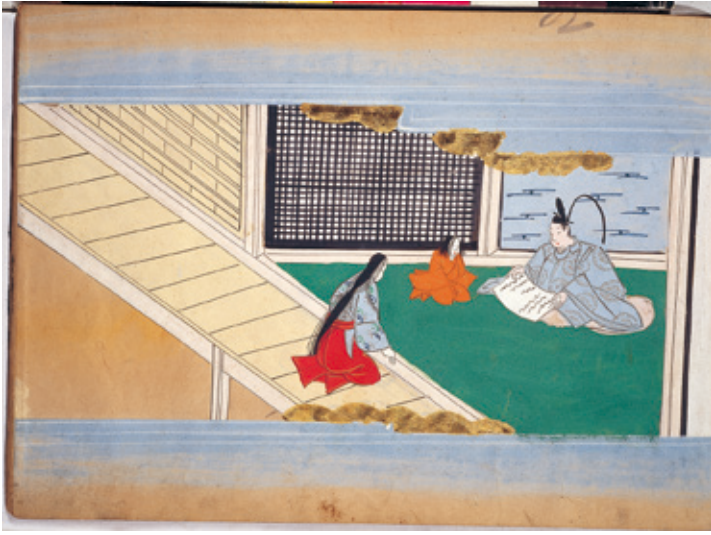
42 奈良絵本 ふしの人あな

一冊 江戸時代写 縦一六・五×横二四・〇cm
 (請求記号 024.3.267.1)

この作品は、仁田四郎忠綱が富士の洞窟に入り、大菩薩の導きにより地獄の六道廻りをするという地獄遍歴の物語で、その伝本は、写本・版本ともに極めて多い。

松本隆信氏の『室町時代物語類現存本簡明目録』によれば、写本は慶長八年写本以下四十本、版本は古活字版以下十五種が列挙されている。ことに目立つのは近世末期の写本が多いことで、これは江戸時代後期に盛んであった富士信仰と関係があるといわれている。しかしながら、これらの写本のほとんどは一冊本で挿絵はなく、絵入写本は本書を除けば、京都大学国文研究室蔵の『富士草紙』と題する絵巻一卷と、ニューヨーク・パブリックライブラリー蔵のスペンサー・コレクションの奈良絵本横本三冊を見出すに過ぎない。

本書の挿絵の数は五図で、絵の天地に雲霞を描き極彩色で地獄の絵も具象的で凄惨を極めている。もとは二冊本であったと思われるが、残念ながら本図書館所蔵のものは「下」一冊だけである。



43 奈良絵本 志賀物語

一冊 江戸初期写 袋綴 縦一六・八×横二四・三CM

(請求記号 022-747-1)

当該本は、奈良絵本で、挿絵は五図である。表紙は紺地に金泥で秋草模様。表見返しは菱型模様の銀紙。外題は、金泥秋草模様の朱の題簽に「志加物語下」と墨書。

挿絵は、すやり霞の雲形を絵の天地に配しているのは他の奈良絵本と同様である。絵は素朴なもので、単純な構造の中に淡彩の顔料を用いているが金泥を用いている箇所もある。

本書は本来上下二冊であるが、上巻は失われている。本書以外に、東京大学・金刀毘羅宮図書館に完本が存し、いずれも奈良絵本として伝存する(古典文庫所収久原本は存否不明)。内容は、堀川中納言の姫君と深い契りを結んでいた大納言の御子の少将が、大臣家に取り込まれて帰れなくなり、姫は少将の心変わりを恨んで志賀に身を隠し、若宮を産んで死ぬ。少将は後、姫の死を知り、菩提を弔い、若君は出世して大将となるというもの。



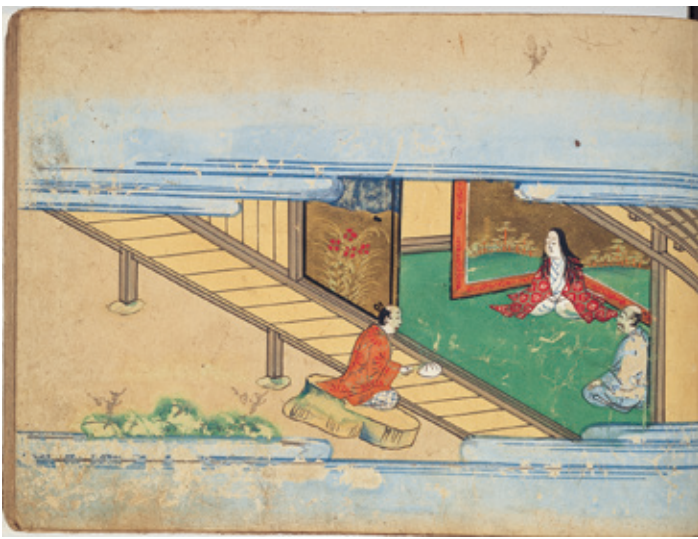
44 奈良絵本 竹取物語

三帖 江戸初期写 縦三三・二×横一七・三cm

(請求記号 021-578.3)

本書は、寛文延宝頃に作成された奈良絵本で、全体的に保存状態は良好である。本文は一面十行書。挿絵の直前や巻末の一部では本文が散らし書きになっている。挿絵は上が四図、中が四図、下が四図である。挿絵は、半葉(二頁分)のものと同開き二頁のものと同二種類がある。この期の奈良絵本と比べて、しっかりとした構図を持つ。挿絵は濃彩である。詞書部分の料紙にも、金泥で草花などの下絵が描かれている。奥書はない。

本中の挿絵について、龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センターで顔料分析を行った結果、絵に使用されている「青色」の中にコバルトを主とした顔料が見つかった。コバルト入りの顔料を取り入れて描くことの最も早い例として注目すべき発見といえよう。



45 奈良絵本 竹取物語たけとりものがたり

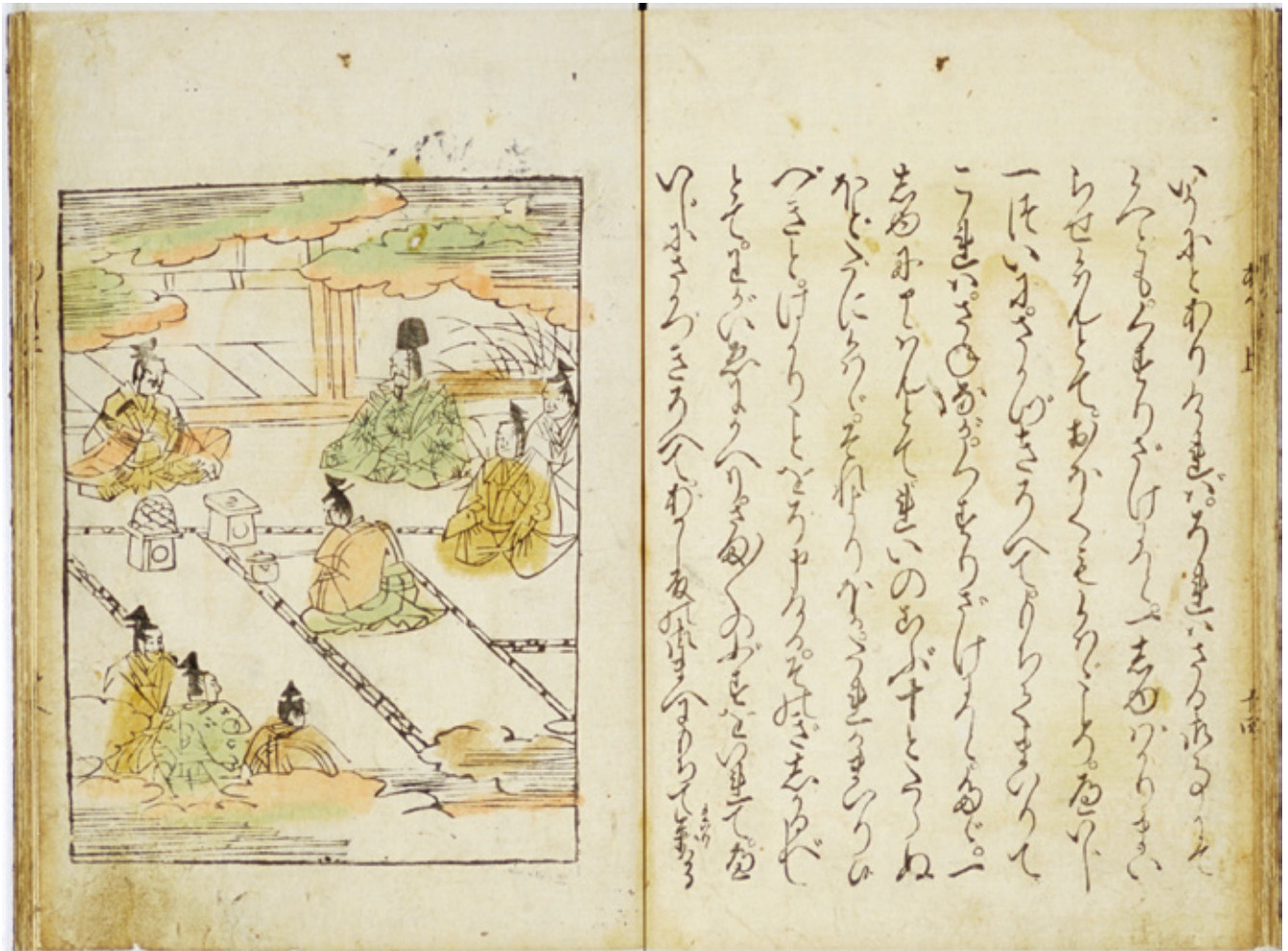
二冊 江戸前期頃写 列帖装 縦一六・七×横二四・五cm 中川文庫蔵本

〔請求記号 024.79・2〕

当該本は、江戸時代前期に製作された奈良絵本で、もと三冊本(上・中・下巻)であったが、現在はその第三冊目(下巻)を欠く。挿絵は、第一冊(上巻)五図、第二冊(中巻)六図。

『竹取物語』には、江戸時代の写本や版本、絵巻物、奈良絵本などがあるが、江戸時代以前の写本の伝本は極めて少なく、また当該本のような奈良絵本の伝本もそれほど多くはない。当該本の本文は、古活字十一行丙・丁本の本文に拠るもので、貴重である。

なお、本書については「奈良絵本『竹取物語』の一本について」(中川浩文著『竹取物語の国語学的研究』所収)に詳しい。



46 あかし物がたり(丹緑本)

一冊 寛永頃刊 縦二四四×横一七三cm
 (請求記号 021-598-1)

別名『あかし』『あかし三郎』とも称する室町時代に成立した御伽草子である。内容は、美しい妻に対する悪人の横恋慕から起る地方武士の受難・復讐の物語である。文中に挿絵があり、その絵にごく簡単に赤(丹)や緑・黄の筆彩色を施されているところから丹緑本と呼ばれている本である。丹緑本は残存が少なく珍重されている。



47

源氏物語絵巻
げんじものがたりえまき

一巻 土佐光貞画 文化二年(一八〇五)写 縦二七・〇×横一三八・五cm

〔請求記号 022.1.205-1〕

紫式部の『源氏物語』を絵巻にしたものである。『源氏物語』の絵画化はおそらく原作成立後まもなく始まり、以降各時代で絵巻・冊子絵・色紙絵・屏風絵などさまざまに形態や表現様式で描かれてきた。本絵巻は、二十一「乙女」(本絵巻では「蛭」となっている)から五十四「夢浮橋」までの三十四図が描かれてある。土佐光貞(一七三八～一八〇六)は、江戸時代中期・後期の土佐派の画家で、巻末に「文化二年冬日 光貞」と記されている。



48 三十六歌仙画帖

一帖 伝狩野探幽画（歌）飛鳥井雅章筆 江戸前期写 画帖装

（帖）縦一五・七×横二二・八cm

（本紙）（絵）縦九・六×横八・〇cm（和歌）縦九・六×横七・六cm

〔請求印号 022-755-1〕

本書は、表紙唐草模様織物装、見返し金泥模様入、裏には金切箔を散らしている。見開きに歌と絵が対になる形で貼り込まれ、柿本人麻呂から中務までの三十六歌仙の各歌人の絵（色紙）と和歌を左右に貼った画帖で、各絵の右下か左下に落款が捺されている。絵の寸法は、縦九・六cm、横八・〇cm。和歌は、金粉で霞を引いた小色紙（縦九・六×七・六cm）等に書かれている。各々の絵は小さいものではあるが、筆致は繊細で、上品に仕上がっている。また、画帖の末尾に「飛鳥井殿雅章卿三拾六歌仙（印）」と書かれた極札が貼られている。

飛鳥井雅章（一六一一～一六七九）は、後水尾院の子飼いの弟子で、院の文事に深く関わり、後水尾院歌壇で活躍した歌人である。また和歌だけでなく、蹴鞠の宗匠としても武家の門人を多く抱えていたことはよく知られている。



49 三十六歌仙絵巻

さんじゅうろっかせんえまき

二巻 三十四図 狩野益信画 伝賀茂真淵賛 江戸中期写

絹本金銀泥彩色画 古筆了悦極札付 卷子本

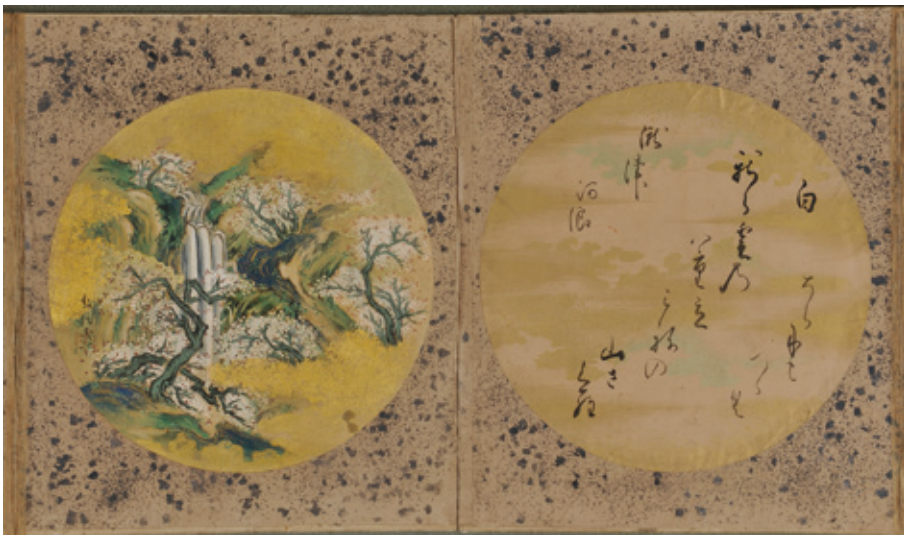
縦三三・三三CM 横左方卷五七七CM 右方卷五七三CM

〔請求記号 021・185・2〕

歌仙絵は、歴史上の著名な歌人が、左右に分かれて歌合わせを行う、という想定で描かれた絵である。本作では左方の巻に、平兼盛から在原業平にいたる十七人が、右方の巻に紀貫之から中務にいたる十七人が収められている。左方の歌仙は顔や体を左に向け、右方の歌仙はその反対の姿勢で表される。中央に座す貴人ないしは判者に顔を向けているという趣向であろう。絵師の狩野益信の落款が左方巻の巻頭、右方巻の巻末にあるのは、落款が歌仙たちの末席になるように、という絵師の配慮に基づいている。大ぶりの画像に金銀泥を混じえた彩色が美しい絹本であるのが珍しい。古筆了悦の極札が添えられている。

絵師の狩野益信は通称采女、洞雲と号した。金工の後藤光頼の三男で狩野探幽に学び、のちにその娘婿となった。駿河台狩野の祖として知られている。元禄七年（二六九四）没、享年七十歳。

なお、三十六歌仙のうち、惜しくも左方兼輔、右方小町の二図が欠落している。



50 五色手鏡

一帖 狩野教信画
江戸時代写 折本 縦二四・三×横二〇・五cm
〔講求記号 021-586-1〕

『五色手鏡』は、『五色和歌』を書写したものである。『五色和歌』は江戸時代の類題集で編者は未詳。元禄三年（一六九〇）頃の成立かと考えられ、『片玉集』第三十巻中に収められている。この和歌は陰陽五行説に基づき、青・黄・赤・白・黒の五色を題にして、五人の詠者が、一題一首を詠じたものである。

本学図書館所蔵の『五色手鏡』は『五色和歌』を五人の公家たちに書写させ、手鏡としたものであり、画に狩野教信の銘がある。

51 須弥山儀銘並序

一幅 円通(無外子)著 文化十年(一八一三)刊
 縦二九・〇×横五三・〇cm

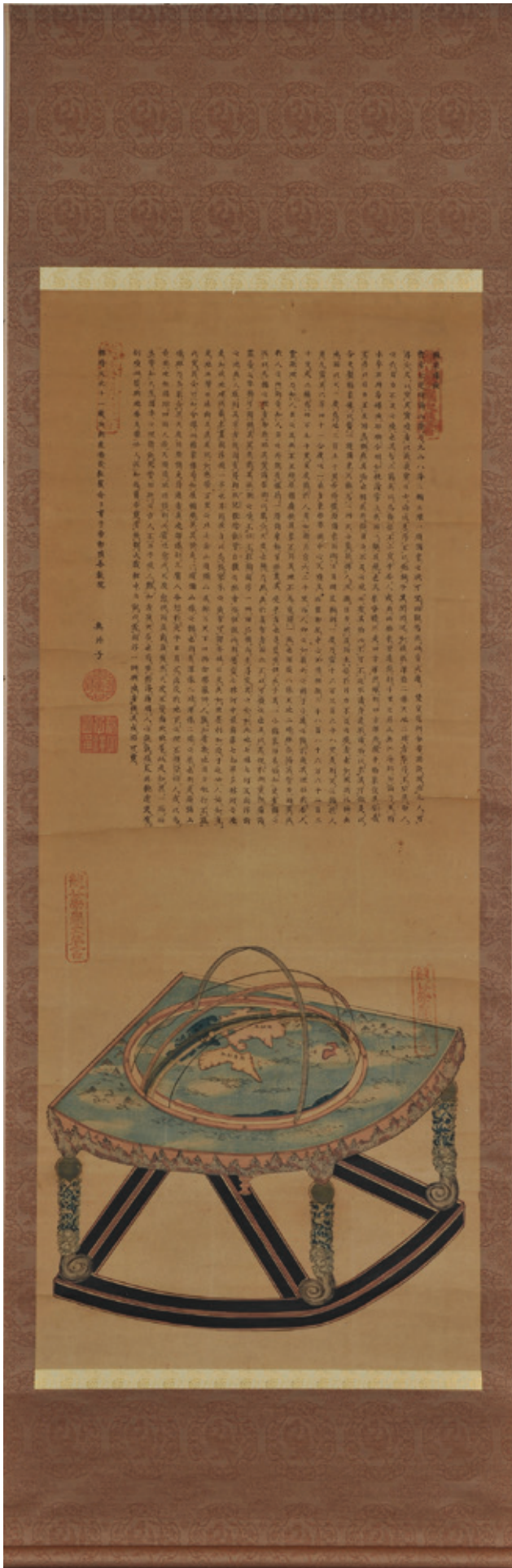
(請求記号 Q23.1.404.1)



円通が考案した須弥山儀に関して図と解説で表現したもの。司馬江漢の銅板『屋耳列礼図』(オーレリー図)を参考にし、これに対抗した形で作られたと考えられる木版画である。須弥山儀の図では、地上の平面的な形状の上に須弥山を中心とする世界が広がっており、これを覆う形で日・月・星群が動く仕組みになっており、天動説の立場であることがわかる。

縮象儀説(図)

一幅 円通著 文化十一年(二八二四)刊 縦二九〇×横五三〇cm
 (編次記号 023.1.403-1)



『須弥山儀銘並序』に続いて翌年に作られた木版画。文中に「一須弥界の天縮して一洲の天と為るの象を審かにす」と説明されるように、須弥山の周りを囲む東西南北の四つの島のうち、我々人間が住むといわれる南瞻部州という大陸を拡大したとして、ここに西洋風の大陸図をあてて描き天動説にもとづく天体の動きをする縮象儀を表現している。このように西洋の天文学・地理学を取り入れながらも、仏教天文説を正当化し、擁護しようとする円通の姿勢がうかがえる。

53

世界大相図

一幅 存統著 文政四年(一八二二)刊
木版画彩色 縦一三〇・〇×横五六・五cm
(請求記号 023.1.358-1)



須弥山を中心とする宇宙模型図。この種のもは、中国、チベット、東南アジアの各地で描かれ、我が国でも盛んに作られた。龍谷大学所蔵のものは、文政四年(一八二二)の作で存統の筆による木版画に手彩色がなされたものである。中央の青と赤に塗られた山岳が須弥山で、その右下に海に囲まれた南瞻部州が描かれ、その下は八熱地獄層をなしている。

龍谷大学大宮図書館 二〇二三年度特別展観
絵のある本

開催期間：二〇二三年(平成二十五)年十月十七日(木)～十月二十五日(金)

二〇二三年(平成二十五)年十月

編集 龍谷大学大宮図書館

発行 龍谷大学大宮図書館

〒601-8506 京都市下京区七条通大宮東入大工町一二五―一

電話(〇七五)三四三―三三二(代表)

解題執筆 龍谷大学大宮図書館

印刷 株式会社 図書印刷 同朋舎

写真撮影 堀出 恒夫(第一スタジオ)

著作権等は、龍谷大学に帰属します



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY